

## 5 歳幼児の対話と協同的学びを引き出す教材研究の実践例

会津大学短期大学部 幼児教育学科  
郭 小蘭

### I. はじめに

2017年告示版の「幼稚園教育要領」・「幼保連携型認定こども園 教育・保育要領」・「保育所保育指針」のキーワードの1つは「主体的・対話的で深い学び」である。これは学校教育におけるアクティブ・ラーニングの幼児期版のことである（無藤 2017）。無藤によれば、主体的とは「自分からやろうとすること。同時にそこに見通しをもち、遊びを振り返ること」である。対話的とは「こんなことを見つけた」という自分の発見を伝え合うことや「どうするの？」に対して「こうするといいいよ」というようなやりとりである。深い学びとは幼児の考える力の基礎となる「仕組み」や「仕掛け」についての疑問「なんで？」という理由を問うことである。3歳から5歳の各発達段階に合わせて、学びが深まる工夫が幼児期の教授学習法として求められるようになった（無藤 2017）。

一つの教材は工夫することにより様々な遊びが生まれるが、「主体的・対話的で深い学び」ができるような教材はどのようなものだろうか。筆者の仮説では、①主体的な学びを引き出す教材の条件は学習者にとってまず新奇性のある刺激である。ある程度の困難度があるが、いろいろと試してみればできるというような教材であろう。鹿毛は『モチベーションを学ぶ12の理論』（鹿毛 2012）という著書の中で「おもしろい」・「楽しい」・「好き」という感覚は「興味をもつこと」や「夢中になること」という学習活動を引き出す要素である。さらに「興味をもつこと」や「夢中になること」は学習者の自律的学習動機であると述べた。鹿毛は西村・河村・櫻井（2011）の「自律的学習動機づけ尺度の項目」を著書の中に引用した。その中の「内的調整」というカテゴリーに含まれる5つの項目は次の5つである。「①問題を解くことがおもしろいから。②難しいことに挑戦することが楽しいから。③勉強すること自体がおもしろいから。④新しい解き方や、やり方を見つけることがおもしろいから。⑤自分が勉強したいと思うから」。鹿毛の研究は主体的な学びを引き出すために学習者自身が自ら興味をもって、困難があると知りながらチャレンジすることが必要であると指摘していると筆者は理解している。筆者は教材研究という視点からみて、学習者の「興味・関心」を引き出し、努力により達成感が得られるような教材が望ましいと仮定する。②対話と協同的な学びを引き出す教材の条件は複数の学習者がいること、また、

他者の反応や手助けが何らかの形で必要であり、相互作用が楽しいような教材であると仮定する。具体例で言えば、Aさんは自分の気づきや発見を動作や表情のほかにとくに言葉でBさんに伝える。そして、Bさんは観察や聴くことによりAさんの発見の意味を理解した上でまねして参加する。さらにAさんとBさんは対話や操作の中で共通の興味や課題に気づき、協力し合って課題を解決していく。この仮定を裏付ける研究は『アクティブ・ラーニングのための心理学—教室実践を支える構成主義と社会的学習理論』(田中訳 2017)と『学びと教育の世界—教育心理学の新しい展開』(佐藤 2013)である。

本稿の目的は、筆者が指導するゼミで製作した手作り布遊具(名称:「探検シート」)を用いて5歳幼児の遊具の遊ぶ過程及び保育者の指導過程を観察して、「探検シート」という教材は5歳幼児の対話と協同的遊びを引き出す教材であるかを検証することである。

## II. 実験内容

**対象** 実験協力園の5歳児16名(男児6名, 女児10名)と保育者1名。幼児は8人ずつ2組に分かれて、15分ずつ「探検シート」で遊んでいた。最初に実施した組(仮称:Y組)は月齢の高い組で男児6名(5歳5カ月から5歳8カ月までの幼児)と女児2名(5歳5カ月と5歳8カ月)であった。次に実施した組(仮称:M組)は月齢の低い組で男児4名(5歳2カ月から5歳5カ月までの幼児)と女児4名(5歳1カ月から5歳3カ月までの幼児)であった。

**実施方法** 事前に筆者が用意した手作り布遊具を協力園に運んで行き、保育者に実験の目的及び布遊具の遊び方や仕掛けを説明し、実験対象を選ぶよう依頼した。実験する前日に保育者はクラス全員の子どもたちに1回一方通行で出ては入るというような遊びを繰り返す遊び方で遊んでもらった。その結果、気づいたことはクラスの園児人数が多かったため、実験に全員参加が難しいと担任保育者は判断して、クラスから5歳半くらいの幼児8名と5歳になったばかりの幼児8名、計16名を実験対象として選んでくださった。実験実施時間帯は午後3時半から午後4時までの30分であった。保育者に実験時の環境構成と指導法は普段通り行っていただきたいと依頼した。幼児が遊具を遊んでいる過程及び保育者の指導過程を筆者は無音写真撮影で記録していた。また、ゼミ生も実験場面を観察してそれぞれのゼミ生にとって印象深い幼児の姿及び保育者の導入や活動の展開にかかわる声かけの内容等を筆記用具で記録していた。筆者は別の日に担任保育者に「活動からの気づき」について感想を聞いた。

「探検シート」の写真（デザインは東間 2012 を参照した。）

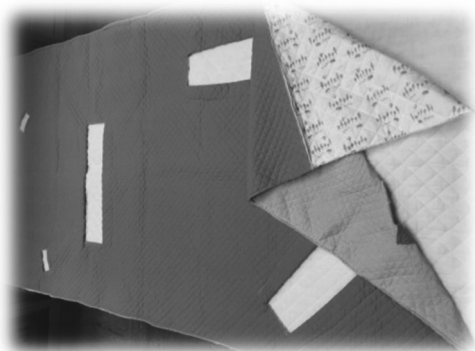


図 1. 大きいキルトシート  
(200×110 c m)

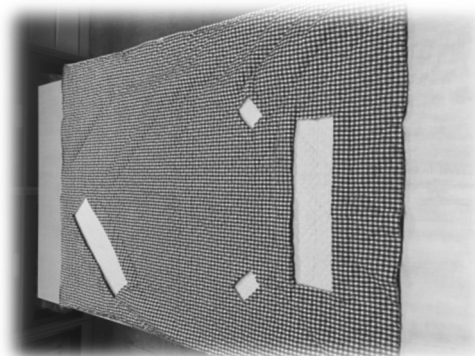


図 2. 中くらいのキルトシート  
(150×110 c m)

想定される遊び方：

- ① 大きいシート（図 1）と中くらいのシート（図 2）の中を潜ったり，手足を出したりして遊ぶ。
- ② 大人数で入れるくらいの大きさ（図 1）なのでシートの中で楽しむ遊び方。
- ③ 布の色が裏表で違い，遊び方の変化があるかもしれない。
- ④ 体に巻き付けて遊ぶ（図 4）。
- ⑤ 穴の大きさと位置に興味を持ち，探検気分になるだろう。

**分析方法** 分析内容は筆者が無音写真撮影で撮った記録とゼミ生の観察記録に基づいて，以下の 4 点である。分析方法は幼児については主に幼児の会話分析法で，自然発生の生の幼児の姿を描く。保育者については「導入」と「展開」の声かけの言葉と動作を分析内容とする。

- (1) 「探検シート」は 5 歳幼児の探求心・意欲を動機づける教材であり，幼児の主体的な遊びを引き出す教材であるか。
- (2) 5 歳幼児の遊ぶ過程にどのような遊び方が見られたか，それらの遊び方は対話的と協同的遊びであったか。
- (3) 幼児期に育てたい資質・能力の 3 つの柱を反映する幼児の姿があったか。
- (4) 保育者の役割について

分析の判断規準については

(1) 「探検シート」は 5 歳幼児の探求心・意欲を動機づける教材であり，幼児の主体的な遊びを引き出す教材であるかについては，まず，遊具に興味を示すかどうかの判断基準としては幼児が布遊具を見たときの反応と時間いっぱい遊具を遊んだか，また，遊んでいる時に驚き，喜びなどの歓声や表情，仲間と遊具でやり取りや関わりをもったかで判断する。次に，主体的な遊びであるかどうかを判断する基準としては，自分からやりたい，自

分の工夫，仲間との積極的なやり取り，楽しむ姿で判断する。(2)5歳幼児の遊ぶ過程にどのような遊び方が見られたか，それらの遊び方は対話的と協同的遊びであったかについては会話と協力する行動の姿で判断する。(3)幼児期に育てたい資質・能力の3つの柱を反映する幼児の姿があったかについては「知識及び技能の基礎」では気づきや発見の姿(無藤2017)，「思考力，判断力，表現力等の基礎」では試したり，工夫したりする姿(無藤2017)，「学びに向かう力，人間性等」では，感性，意欲，粘り強く取り組むこと，友達と協力してチャレンジする姿(無藤2017)で判断する。(4)保育者の役割については，「説明や提案」，「見守る」，「守り立てる」(無藤2017)というような姿があったかで判断する。

### Ⅲ. 結果と考察

#### 「探検シート」は5歳幼児の探求心・意欲を動機づける教材であり，幼児の主体的な遊びを引き出す教材であるか

まず，「探検シート」を見た時の幼児の反応については，実験開始と共に「探検シート」を見て笑顔になる幼児が多かった。自分たちでシートを広げて，早速シートに潜り込んで，次から次へと幼児たちは潜り込んで抜け出す遊びを繰り返していた。抜け出した後，笑いながら走ってまた潜り込むという活発な動きが観察された。また，時間いっぱい遊具を遊んだかについては，対象幼児の普段の生活に影響が出ないよう1組の遊ぶ時間は15分に設定した。実験終了時間時になっても幼児は「探検シート」を振り返り，自分でシートを丁寧にたたんできれいな形に整えていた女児がいた。まだ遊びたいような様子であった。次に，遊んでいる時に驚き，喜びなどの歓声や表情，仲間と遊具でやり取りや関わりはどうかについては，床に座って両手で上半身を支えて顔を上に向けて口を大きく開けて大笑いをしていた女児の表情がおもしろかった。また，中くらいのシート(図2)を体に巻き付けたり(図4)，7人の幼児が一枚の「探検シート」(図3)に入ったりして，できた「探検シート」の形が外側から見ておかしく見えて「お化けだ！」と言ってその形に驚き，一人だけで外でよく観察していた男児の姿が印象深かった。また，「暑い！」「髪がひっぱられている」「わはは」など，大きな笑い声が「探検シート」の中から聞こえてきた。長さが2メートルのキルトでできた「探検シート」(図1)に7人の幼児が入ることができたのは想定外であった。観察側のゼミ生も筆者もその姿を見て一緒に笑っていた。シートの中に入りたいが，他の幼児の活発な動きを見て，自分から「探検シート」の端を持ってあげて他児が潜り込みやすいように手伝っていた男児が写真記録に残っていた。遊びが進んでいく中で，その男児も潜り込んだり，他児と一緒に穴から顔を見合わせて笑ったり，楽しそうに参加していた。

上述した観察の結果から「探検シート」は幼児にとって新奇性のある遊具で，5歳幼児の創意工夫により何種類の遊び方も生まれるもので，5歳幼児の探求心・意欲を動機づけ

る教材であることが分かった。また、潜り込み・抜け出すという遊び方は共通であっても、教材の素材はキルトで柔らかくて、安定した形ができにくいいため、8人の幼児はそれぞれの力でその時の状況に応じて自発的でかつ活発的な活動を多様に展開していた。二組で実施したが、月齢の高いY組は特に創意工夫が多く見られた。月齢の低いM組は他児の遊び方を楽しそうにみている女児が2,3人いた。このように月齢の違いによる発達の変化も見られた。これらの観察結果から「探検シート」は幼児の主体的活動を引き出す遊具であると示唆されたのではないかと考えられる。

#### **5歳幼児の遊ぶ過程にどのような遊び方が見られたか、それらの遊び方は対話的と協同的遊びであったか。**

実験する前に事前に想定される遊び方は①一方通行で出ては入るという遊び方を繰り返す。シートの穴から手や足を出したりして喜ぶ。②大人数で入れるくらいの大きさ(図1)なのでシートの中で楽しむ遊び方。③布の色が裏表で違い、遊び方の変化があるかもしれない。④体に巻き付けて遊ぶ(図4)。⑤穴の大きさと位置に興味を持ち、探検気分になるだろう。実験前に実際のおもしろさや楽しさが何によって生まれるものかについては想定することが難しかった。実際に実験を行ってみると実験の中に上記5つの遊び方が見られて、具体的な遊び方を幼児の会話や動きから観察して気づいたことは、「探検シート」という教材は幼児の多様なイメージを引き出せるごっこ遊びの教材として適しているのであると分かった。なぜならば、実験の中に見られた遊びのテーマは「家ごっこ」から「車ごっこ」へ、そして、「動くお化けごっこ」へ、「かくれんぼごっこ」へという4つの主題であり、これらの遊びはごっこ遊びであるから。4つの主題があるごっこ遊びが生まれたことは想定外のことであった。ごっこ遊びは対話的と協同的な遊びである(神長 2017)ので実験中に見られた遊びは対話的と協同的遊びであると言えよう。

4つの主題遊びの具体的な姿については、一つ目は「家ごっこ」であった。「探検シート」の中の空間は家になり、大きな二つの穴は窓に見立てることができた。一人の女児は「お父さん、お帰り!」と言った後、その次に「いらっしゃいませ」と「お店屋さんごっこ」する幼児もいた。このような会話から「探検シート」は家という建物に見立てられたと考えられる。二つ目は「車ごっこ」であった。一人の男児は大きな穴をハンドルに見立てて「車だ!」と言い、運転する動作をした。その次に何人かの幼児が入っている「探検シート」は車の役割を果たしていた。幼児たちが「探検シート」の中に入り、足で「探検シート」が移動するように協力し合って移動させた。幼児たちの力で移動する「探検シート」を外から見てもおもしろくて、中で操作する幼児たちも楽しい会話でにぎわっていた。幼児、保育者だけではなく観察する側の筆者たちも一緒に楽しんでいた。幼児たちの創意工夫により布でできた「探検シート」は「車ごっこ」という遊び方を引き出したことにその場にいた全員は驚いていた。教材に関するゼミ生の感想は「固定観念を持たないで柔軟に発想することの大切さに改めに気づいた」や「教材研究のおもしろさを感じた」等であった。三

つ目は「動くお化けごっこ」であった。「探検シート」の素材はキルトであるため、色彩も感触も優しくて、体を巻き付けて、いろいろな形ができたり、小さい穴から外を覗き込んだり、移動したりして「おかしい！おもしろい！」という歓声の他に「お化けみたい！」といった幼児の声もあった。お化けの定義を辞書で引くと「普通よりずぬけて大きいもの、異形のもの」というのがあるが、幼児たちは直観的であろうが、「探検シート」の異形という特徴を「お化け」という言葉で正確に表現したと筆者は驚いた。四つ目は「かくれんぼごっこ」であった。保育者の「〇〇ちゃんはどこかな」という誘導の声かけで、幼児たちは穴から顔を出して外にいた幼児をびっくりさせたり笑わせたりしていた。この4つのごっこ遊びに共通する幼児の体験は「主体的・対話的で深い学びの体験」であったのではないかと考えられる。



図 3. 7人の幼児が入っている



図 4. 体に巻き付けて遊ぶ。

### 幼児期に育てたい資質・能力の3つの柱を反映する幼児の姿があったか。

「知識及び技能の基礎」では気づきや発見の姿（無藤 2017）、「思考力、判断力、表現力等の基礎」では試したり、工夫したりする姿（無藤 2017）、「学びに向かう力、人間性等」では、感性、意欲、粘り強く取り組むこと、友達と協力してチャレンジする姿（無藤 2017）で判断する。上述した規準で実験の中に見られた幼児の具体的な姿の例を挙げる。一つ目の柱については、「探検シート」の仕組みについて二枚の「探検シート」の穴に注目して「窓」「車」に見立てて、いくつかの遊び方を発見した。その他、保育者が意図的に「探検シート」を裏向きにして、「反対にしても楽しいよ」と声をかけたら、穴が下となり出てくるのが難しくなるが、「下に出口がある！」「おもしろい！」と幼児の発見した喜びの声が聞かれた。二つ目の柱については、「探検シート」を「秘密基地」に見立てて探検の気分を味わったり、7人が1枚の「探検シート」に入り（図 3）、立っている幼児と跪いている幼児の力でおかしい形を創ったり、「探検シート」を「車ごっこ」として移動させたりする創意工夫が観察された。自然発生の発想であるが、考える力の基礎があることは示唆されたのではないだろうか。三つ目の柱については、「探検シート」の仕掛けは、1枚は4つの穴、もう一枚は5つの穴、これだけわずかな仕掛けであるが、この少ない仕掛けにも関わらず、

幼児たちの豊かな感性と粘り強さと協力精神で安定性がない布シートを車として移動させることができたのである。それらの遊びが展開された後の幼児の歓声と大笑い、じゃれ合う相互作用等から幼児たちの人とかかわる楽しさと協力によって一つの目標を達成することができた時の喜びの大きさが観察者側にも伝わってきた。ゼミ生も筆者も「子どもたちがすごいなあ」という感動を覚えた。以上の具体例を通して、「探検シート」はシンプルな教材ではあるが、幼児期に育てたい3つの教育目標を実現するための教材として適切であるといってもいいのではないかと考えられる。

### 保育者の役割

保育者の役割は2017年告示版「幼稚園教育要領」の中の一つのキーワードであり、以前よりも保育者の専門性が求められている。幼児期においては「説明や提案」、「見守る」、「守り立てる」という指導法が大切である（無藤2017）。本実験では保育者は導入としての声かけは「この間どうやって遊んだかな」と「自由に遊んでいいよ」であった。幼児たちは1回「探検シート」を潜って抜け出すという経験があるので、この声かけの後幼児たちは真っ先に「探検シート」を潜り始めた。「探検シート」の入口が十分に開いていなくて潜りにくさを見て保育者は入口が広くなるようにずっと手で入口の端をもって幼児たちの遊びを見守っていた。保育者は大きいほうのシート（図1）が中くらいのシート（図2）よりもやりにくいだろうという配慮でずっと大きいほうのシート側にいた。少し恥ずかしがる幼児に「入ってこない？」と提案する姿のほかに全体を見守りながら守り立てていた。保育者は正座で同じ姿勢でシートの端をずっともっていたのでかなり疲れていたのではないかと筆者は推察した。2組で30分の実験であったので、保育者は30分ずっとこの姿勢で守り立て続けていたのがすごいなあと尊敬した気持ちが筆者にあった。また、遊びの発展に働きかけるための環境構成は保育者が「探検シート」を裏側にして「反対にしても楽しいよ」と声をかけて、「探検シート」を裏返して、穴が下となり、「下に出口がある！」「おもしろい！」と幼児の新しい発見を引き出した。幼児のことをよく理解しているなあと感じた。

## IV. 総合的な考察と今後の課題

本研究から5歳幼児の遊具の遊ぶ過程及び保育者の指導過程を観察して、「探検シート」という教材は5歳幼児の対話と協同的遊びを引き出す教材であることが示唆されたと考えられる。

「手作り布遊具は幼児にとって材質の特徴や生活を反映する本物らしさという点で魅力である」ということはすでに「学生の保育実践力を高めるゼミ研究の教学効果についての考察—幼児向け布絵本制作実践例」（郭2015, pp. 87-93）と「布玩具魚釣り遊びに見られる幼児の発達段階の違いと効果的な指導法について」（郭2016, pp. 177-186）で例証された

が、例証データの数がまだ少ないので筆者は手作り布遊具の研究を続けている。本稿はその一つである。この2本の論文との共通点は布遊具が幼児教育・保育の物的環境として幼児を惹きつける物であるというところにある。異なるところは、「学生の保育実践力を高めるゼミ研究の教学効果についての考察ー幼児向け布絵本制作実践例」(郭 2015)のほうは研究対象が3・4・5歳児であり、研究目的の一つが年齢ごとに3名一組で小集団における遊びに見られる発達特徴の比較であった。また、「布玩具魚つり遊びに見られる幼児の発達段階の違いと効果的な指導法について」(郭 2016)のほうはいくつかの点で異なる。①指導者は現場の保育者ではなくゼミ生であった。②実験対象は3・4・5歳児で年齢ごとに8人ずつ、計24名であった。幼児たちの発達の違いを見るのが研究目的の一つであった。③指導法を検討するのも研究目的であったため、見守り、共感、励まし、称賛、直接にコツを教えることを指導方法として用いた。その結果、直接に教えることは幼児の年齢段階においては適切な指導法でないことが明らかにされた。本稿の目的は手作り布遊具の教育的効果を幼児の対話と協同的な学習の基礎づくりという視点から検討するものであった。検討した結果、「探検シート」は幼児の自律的学習の動機を引き出すことができ、そして、幼児の主体的活動を引き出す教材であることが分かった。鹿毛(鹿毛 2012)の著書内容は主に学校教育における研究データに基づいたものである。本稿から幼児期の自発的な遊びが学校教育の自律的学習の基礎となるものであり、幼児期の遊びと学童期の学習が一貫して連続しているとのことが同時に示唆されたのではないだろうか。また、「探検シート」を用いて4つの主題があるごっこ遊びが展開された結果から「探検シート」は対話と協同的学習の教材として適切であると考えられる。ここで保育者の感想を引用して「探検シート」の保育実践における有用性も示す。「一度に4,5人の子どもたちが入って喜んでいて。穴から手だけを出して「ヤッホー」と保育者に呼びかけ、保育者が手を握って応えるとキャッキャッと言って手を引っ込めて穴から外側をのぞいて、また手を出さず遊びもあった。また、5分程中に入ってから出てきた子が外側から中にいる子に触れたりして、穴から手を入れる姿も見られた。普段の遊びで仲の良い子同士はスキンシップのようにくっついて遊ぶ姿もあるが、いつも一緒に遊ばない子同士も中に入る事で、触れ合うことが自然にできてどの子も満足そうな表情であった。友達の体温を感じることで安心感を持てたのではないかと思う」。「探検シート」は幼児に好かれる教材であると言えよう。

今後の課題について考察する。幼児の「興味を持つ」と「夢中になる」ことを教育目標とするにあたって、鹿毛は『モチベーションを学ぶ12の理論』(鹿毛 2012)という著書の中に「おもしろい」・「楽しい」・「好き」という感覚は「興味をもつこと」や「夢中になること」という学習活動を引き出す要素であるという。鹿毛の著書内容を取り入れて幼児期に置き換えてみると学校教育で見られる自律的学習の動機の幼児期版は①問題を解くことがおもしろいから。②難しいことに挑戦することが楽しいから。③試したり工夫したりする思考過程と操作過程自体がおもしろいから。④新しい解き方や、やり方を見つけるこ



とが面白いから。⑤自分の好奇心を満たしたいから、という5つの視点からの発想ができないだろうか。特に人間の探求心の理由を考えると、松井（松井2017）の「保育環境における想定外の使い方と遊びの発展」という論文内容が参考になる。松井の論文の71頁に書かれた想定外の遊具の使い方の意義、次の4点が興味深い。それを引用して筆者の今後の研究課題として探っていきたい。(1) おもしろさ：笑いやユーモアが生じる、これまでに経験のない/少ないおもしろさを味わう。筆者のいう新奇性に当たる。(2) 遊びの発展：すでに行われている遊びが新しい展開を見せたり、盛り上がったりする。(3) 物とかかわる経験：自由な発想で物を扱う、標準的な用途にとらわれずに目の前にある物を遊びに生かす。(4) 相互作用のきっかけ：周囲に遊びが見えやすくなり、遊びへの参加者が生まれ、子ども同士の新たなかかわりが生まれる。松井が述べた想定外の遊具の使い方の良さは筆者の「探検シート」で見られた4つの主題活動という研究結果に共通する部分があったように考えて、今後幼児にとっておもしろい教材とはどのような特徴を持つかを継続して探っていきたい。

## 引用・参考文献

- 東間掬子(2012) 豊かな遊びを引き出す手作り遊具 チャイルド本社 20-21
- Alan Pritchard and John Woollard(2017)/田中俊也(訳) アクティブ・ラーニングのための心理学 北大路書房
- 郭 小蘭 (2015) 学生の保育実践力を高めるゼミ研究の教学効果についての考察—幼児向け布絵本制作実践例 会津大学短期大学部研究年報 第72号 87-93
- 郭 小蘭 (2016) 布玩具魚つり遊びに見られる幼児の発達段階の違いと効果的な指導法について 会津大学短期大学部研究年報 第73号 177-186
- 郭 小蘭 (2017) 布遊具遊びに見られる幼児の思考力の芽生え 会津大学短期大学部幼児教育学科 幼児教育研究 第3号 19-25
- 郭 小蘭編著(2017) 教材研究 布遊具研究開発と保育実践—「探検シートで遊ぼう」と「布筒で遊ぼう」 保育実践研究卒業論文集 2017(非公刊)
- 鹿毛雅治(編)(2012) モティベーションをまなぶ12の理論 金剛出版 61-65
- 神長美津子(監修・編著)(2017) 幼児教育・保育のアクティブ・ラーニング 3・4・5歳児のごっこ遊び ひかりのくに
- 佐藤公治(2013) 学びと教育の世界—教育心理学の新しい展開 あいり出版
- 西岡育子(編集)(2017) 平成29年告示幼稚園教育要領(文部科学省) 保育所保育指針(厚生労働省) 幼保連携型認定こども園教育・保育要領(内閣府・文部科学省・厚生労働省) 原文 チャイルド社
- 松井愛奈(2017) 保育環境における想定外の使い方と遊びの発展—2歳児から4歳児まで

の3年間の縦断的検討— 保育学研究 第55巻 第2号 64-72

無藤 隆（監修）（2017）イラストたっぷりやさしく読み解く 幼稚園教育要領 ハンドブック 2017年告示版 Gakken

文部科学省「幼稚園教育要領」

[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/new-cs/youryou/1304415.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/1304415.htm)（2018年5月26日）

付記

本研究の成果の公表については承諾をいただいていることと、本研究にご協力いただいた協力園の先生方と子どもたち、及び筆者が指導するゼミの卒業生の皆様に深く感謝の意を申し上げます。